2025（令和7）年度　ＦＳ最終報告書

FS研究課題名	（和文）儀礼と正負の関係価値から考える人間・文化・自然の連環と共創
	（英文）Rituals and Positive/Negative Relational Values: The Nexus and Co-creation of Humans, Culture, and Nature
FS責任者 （所属・職名・氏名）	横浜国立大学・講師・中臺　亮介
所属プログラム	地球人間システムの連環に基づく未来社会の共創プログラム
研究期間	2025年4月1日　～　2026年3月31日

本報告書はFSの研究成果として地球研ホームページに掲載します。
ページ制限はありません。また、図表を使っていただくことも可能です。

1　研究概要

本FSの研究概要について記載してください。

本研究は、人・自然・超自然の関係を媒介する要因として、超自然的信念および儀礼、ならびに関係価値に着目し、人間社会における持続可能な自然利用のメカニズムを理論的・実証的に解明することを目的として実施された。

人類は歴史的に、自然の恵みを受けると同時に災害にも直面しながら、自然との関係を調整してきた。その過程において、神や精霊、祖霊といった超自然的存在への信念や、それに基づく儀礼は、人と自然との関係を媒介する重要な役割を果たしてきたと考えられる。しかし近代化の進展に伴い、こうした文化的実践は衰退し、人間中心的な価値観の拡大とともに、人と自然の関係は変容してきた。その結果として、気候変動や生物多様性の損失といった地球規模の環境問題が顕在化している。

従来の環境倫理では、自然の内在的価値を強調する立場が主流であったが、この枠組みは必ずしも人々の行動変容を促すものではないという限界が指摘されている。これに対して本研究では、文化や文脈に依存した関係性に基づく価値である「関係価値」に着目し、とりわけ宗教的信念や儀礼といった実践が、人と自然の関係をどのように調整してきたのかを明らかにすることを試みた。

FSでは、進化ゲーム理論に基づく数理モデルによる理論的分析と、全国規模の心理学的調査および尺度開発による実証的分析を統合的に進めることにより、人間の価値観・信念・行動がどのように人と自然の関係を形成し、持続可能性に寄与しうるのかを明らかにした。

2　FSで得られた成果

FS期間中の研究成果（手法の開発や組織の形成を含む）を具体的に記載してください。また、成果物があれば具体的に示してください。当初予定していた目標の達成の成否とその理由を述べてください。

FS期間中には、理論・実証の両面において複数の成果が得られた。

まず理論面では、進化ゲーム理論に基づく数理モデルを構築し、超自然的罰への信念が資源利用行動に与える影響を解析した。その結果、超自然的罰に対する恐れが十分に強く、かつ社会内で共有・伝播される条件下では、利己的な行動が抑制され、資源の過剰利用が回避されるとともに、資源が回復・維持されることが示された。このモデルは、信念の強度や伝播のしやすさといった要因に応じて、資源崩壊と持続的利用の分岐が生じることを明らかにし、文化的・心理的要因が資源動態に影響を及ぼしうる理論的条件を提示した。この成果は、FSメンバーによる共著論文として学術誌に公表されている（Shibasaki et al. 2025 Humanities and Social Sciences Communications）。

次に実証面では、自然に対する価値観を測定する心理尺度の開発と検証を行った。全国規模の調査データを用いて分析を行った結果、自然の価値は内在的価値、関係価値、道具的価値の三次元から構成されることが確認された。また、関係価値が高い個人ほどアニミズム的傾向や擬人化傾向、自然との一体感が強い一方で、内在的価値が高い個人は人間中心主義を否定する傾向を示すことが明らかとなった。これにより、自然に対する価値観と世界観・心理特性との関係が実証的に示された。この成果は、日本における尺度の妥当性検証として論文化されている（Tateishi et al. 2026 Current Research in Ecological and Social Psychology）。

さらに、自己・社会・自然の関係性を統合的に捉える新たな心理学的手法を開発した。この手法では、自己と自然、自己と社会、自然と社会の関係性を連続的な重なりとして測定し、それらの相対関係を三角プロットとして可視化することが可能となった。これにより、人間が自然とどの程度心理的に結びついているか、また社会との関係とのバランスがどのように形成されているかを定量的に評価する枠組みが提示された。

加えて、理論と実証の統合を通じて、持続可能な人間－自然関係の特徴として「ほどよい関係（moderate relationship）」の概念を整理した。資源利用の観点では、過剰利用と過少利用の双方を回避する中庸的な利用状態が長期的な持続性を最大化することが示された。また心理的観点では、人間が自然と過度に分離する場合だけでなく、過度に一体化する場合にも問題が生じうることが示され、適度な距離と結びつきを保つ関係の重要性が明確化された。さらに、関係価値と道具的価値の間には単純なトレードオフだけでなく相乗効果が存在することが示され、従来の価値論を統合的に再整理する知見が得られた。

これらの成果を踏まえると、当初設定した目標であった数理モデルの構築、心理尺度の開発と検証、人間と自然の関係を捉える新たな評価枠組みの提示はいずれも達成されたといえる。特に、理論と実証を接続し、関係価値を中心とした統合的枠組みを提示できた点は、当初計画を上回る成果であった。

一方で、地域におけるフィールド調査の深化や、社会的実践への展開については、FS期間内では限定的な実施にとどまった。これは、学際的統合のための理論構築および手法開発に重点を置いたことによるものである。したがって、FSの成果は主として理論的・方法論的基盤の確立に位置づけられる。